

## 課題図書の一部 佳作

### 仲里陽平さん 法学部法律学科2年

課題テーマ：人生100年

『屈辱ポンチ』 町田康著 / 文芸春秋社

解説：保坂和志-現実のそこに横たわるリアル-

#### 「保坂和志が解く町田康の墮落」

唐突に「人生100年」と宣告されて、私たちはどう考えるだろうか。楽観的に、自分の命数が100年あることに驚喜するだろうか。まあ、初めのうちはそうかもしれないが、しばらくすると、人生が100年あることに悲観していくのではないだろうか。何故、私たちは悲観的な考えに至ってしまうのだろうか。それは、行為の連続であるからだ。いつのまにか、行為の連続の予測をもって悲観しているのである。「人生100年」の時代にあるのに、僅か20年を経過したところで、大凡の将来の見通しが立ってしまうのである。また、指先ひとつである程度のことを調べられてしまう。これでは、「人生20年」である。私たちはこんな程度で悲観しているべきなのか。

そこにきて、小説家の保坂和志は示教してくれる。「いざというときになると、普通に社会で生きる価値観や感覚なんて何ほどのものでもなくなって、人間には文学が迫り上がってくる」というのである。さらに、「それは文学が社会生活の片隅の余暇だからではなく、社会の根底に横たわっているものだからで、船や飛行機に乗っているときに海の深さや空から地面までの高さを意識しないでいられたものが、沈没や墜落のときに圧倒的にその深さや高さが問題になる、その領域が文学というもので、社会生活というのはそういう恐怖や不安の存在を忘れさせるようにできているのだが、町田康の主人公たちは社会生活からずり落ちたために文学に直面することを余儀なくされる」と指摘する。

ここで、町田康という人物、また彼の小説について少し言及すると、町田康は1962年大阪府生まれで、高校時代より、町田町蔵の名で音楽活動を始め、パンクバンド「INU」のボーカリストとして歌手デビュー。1996年に「くっすん大黒」で文壇デビューし、2000年には、「きれぎれ」で第123回芥川賞を受賞するなど、独特の文体で、墮落した人物を面白おかしく描いてきた。町田康にとって、墮落を描くことは畢生の大事業なのである。

そして、保坂は「町田康の笑いはまさに『笑い』であり、『こんなときにも人は笑う』あるいは『こんなときにこそ人は笑う』ということを知らされる笑いなのだ」と評するのである。また、「彼が小説を書くのは、彼の小説の主人公たちがあれこれあれこれすることとひじょうにちかく、ただ彼と彼の書く主人公が決定的に違っているのは、町田康が『小説を書く』という状況を最後までやりとげることだが、それはもしかしたら町田康の『まともさ』を意味しているのではなく、町田康の生きている状況が主人公たちよりも重いということの意味しているのかもしれない」と推し量る。そして、「文学とはそういうものなのだ」と念押しする。

保坂は最後に「現実の底にあるもの、リアルなものとは、見通しを遮断する力に溢れていて、それに立ち向かえるのはほんの一握りの小説家だけなのだ」と町田康を称賛する。私たちは未だ文学に直面していない。指先を動かし、得た情報やたった20年の経験、手札で得た見通しに悲観する必要などない。私たちの人生は行為の連続、踏襲ではない。人生は100年ある。町田康は墮落を描き、私たちに見通しを遮断する力を与えてくれるのである。